

令和2年度前期  
学生による授業アンケート  
調査の結果

令和2年10月

志學館大学事務局学務課  
志學館大学 I R室

## 令和2年度前期 学生による授業アンケート調査の結果

この報告は、学生授業アンケート結果の概要を示し、個々の教員が自己の担当授業のアンケート集計結果を基に自己点検・評価をするために必要な統計的情報を示すことで、授業の改善を考える上での参考にして貰うことを目的とする。また、これらの資料を分析することで、本学の教育改善に資するための情報を得ることを目的とする。

### 1. 調査の概要と資料

令和2年度前期の質問及び回答選択肢は、平成30年度以来のものを踏襲した前年度後期と同じで、以下のとおりであった。なお、以下では質問項目の順序を入れ替えグループ分けしてあるが、この分類はアンケート時に示されていたものではない。

#### 【授業スキル関係】

- Q1. 授業の分量は適切であった (5. 強くそう思う～1. まったく思わない)
- Q2. 授業の進み具合は適切であった (同上)
- Q3. 教員の教え方はわかりやすかった (同上)
- Q4. テキスト、プリント、板書、提示資料等は理解の助けになった (同上)
- Q5. 毎回の授業のねらいははっきりしていた (同上)

#### 【アクティブラーニング関係】

- Q7. 授業には、新しい知識の獲得や発見に、学生を導くような工夫や仕組み、働きかけがあった (同上)
- Q8. 質問や意見に適切に対応してもらえた (同上)
- Q9. 予習、復習の課題やアドバイスは適切に与えられた (同上)
- Q14. 積極的な参加 (自ら考えながらの受講) が求められる授業だった (同上)

#### 【教育の質保証関係】

- Q6. 授業は講義要項に沿った内容であった (同上)
- Q16. この科目の「到達目標」(シラバスに記載)に達することができたと思いますか

#### 【学生の学習行動関係】

- Q10. この科目の予習に毎週当てた平均時間 (1. していない、2. 30分程度、3. 60分程度、4. 90分程度、5. それ以上)
- Q11. この科目の復習に毎週当てた平均時間 (同上)
- Q12. 授業時間内にこの科目を熱心に学習した (5. 強くそう思う～1. まったく思わない)
- Q13. 授業時間外にこの科目を熱心に学習した (同上)
- Q15. あなた自身の受講態度の総合評価 (10. 高⇔1. 低)

その他 自由記述による意見

Q14は平成30年度のQ10と同じで、Q16は30年度に新設した質問である。Q11の学習時間の「5. それ以上」は簡易的に120分として分析したのと、演習科目と共通教育科目のみに係る質問には無回答のものが多かったため、また、大学院課程では資料数が少なかったため、分析対象としなかったのは、30年度以降同じである。

### 2. 分析方法と結果

学士課程の今期の開講授業から、アンケート調査の対象となっていない授業や回答なしの授業を除き、262(249, 256)授業で回答が得られた(括弧内は、平成31(令和元)年度前期及び後期の値である。以下、括弧内において同じ)。このうち回答数が10(10, 10)以上の186(148, 160)授業を分析対象とした。各授業の質問項目ごとの評価点は、複数の学生による回答の平均値と標準偏差で代表した。以下、この平均値の全授業にわたる平均値と標準偏差及び標準偏差の全授業にわたる平均値を求めた。

回答数が10(10, 10)未満で分析対象としなかった授業は76(101, 96)授業であった。回答数10以上を分析対象とした理由と、それゆえに分析結果の解釈に統計学的には一定の留保が必要である点はこれまでと同じである。

## 2.1 授業の内容及び方法

### (1) 回答率

分析対象とした186授業の平均回答率（全受講者数で全回答数を除いたもの）は0.37(0.44, 0.43)で、近年でもっとも低かった。なお、アンケート対象すべてである262授業では、回答率は0.36であった。中には受講数70で回答者が10名に満たない授業もあり、一部の授業では教員から学生への周知が未だ不十分であったものとする。

### (2) 個票の質問別回答平均値

授業スキル関係のQ1～Q5の質問への、授業ごとの回答の平均値の分布を図1にヒストグラムで示す。比較のために、左側に令和2年度前期、右側に令和元年度後期の結果を示す。多くの質問で、左に大きく離れた例がありつつ、やや評価点が高い側に偏った単峰型のグラフとなった。Q2を除く他のすべての項目で、モードは4.25以上～4.50未満の階級にあった。昨期にはすべての設問でモードが4.25以上～4.50未満の階級にあったのに比べて、Q2でのモードは一階級低い、4.5以上～4.75未満の階級が大きく増加しており、改善の結果とも見える。

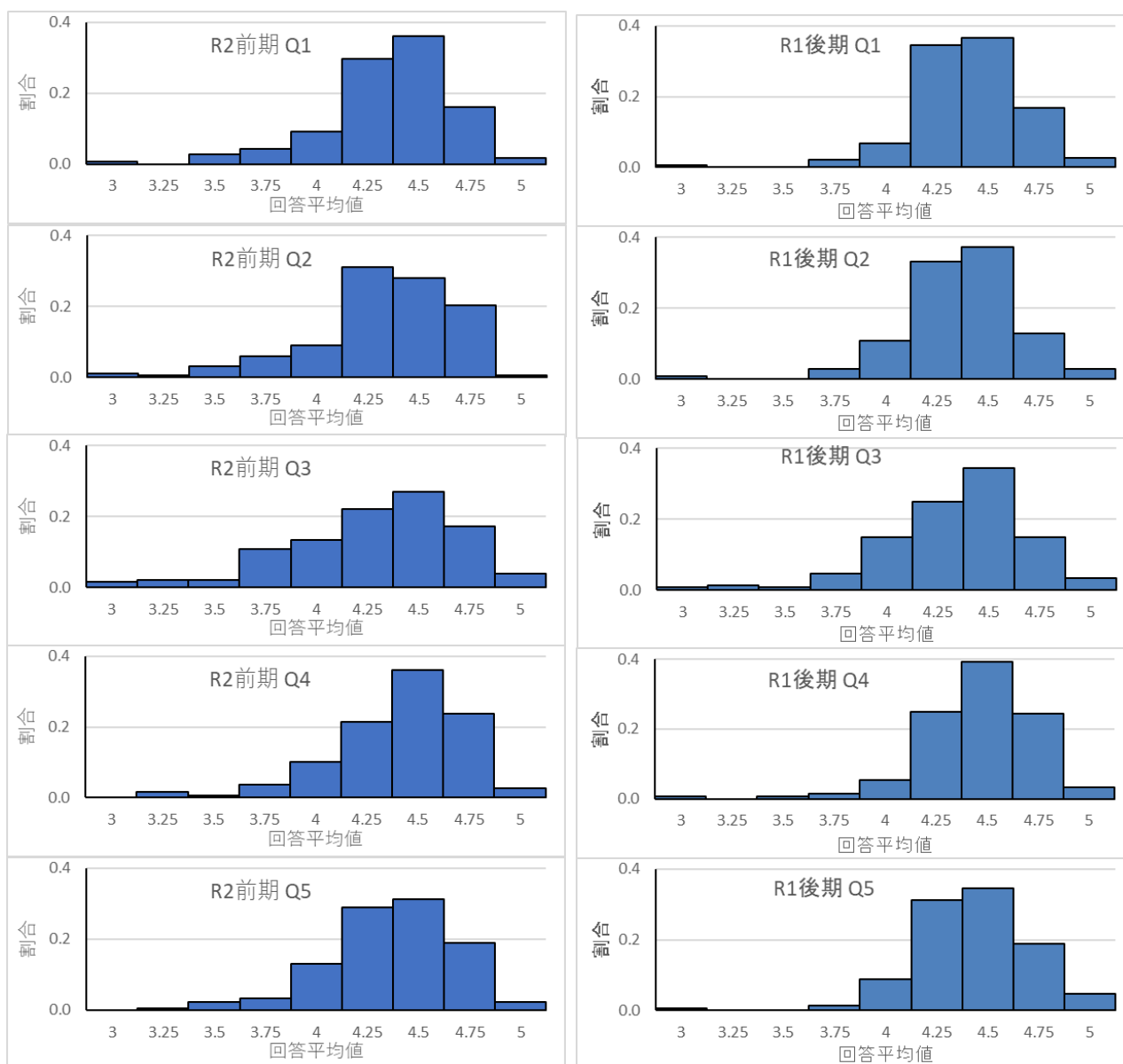


図1 質問項目ごとの回答平均値の分布(Q1～Q5)： 授業スキル関係

アクティブラーニング関係関係のQ7～Q9, Q14の結果を図2に示す。分布は授業スキル関係に比べて、左に裾を引く程度が小さく、より正規型に近いものであった。すべての質問で、モードは4.00以上～4.25未満の階級にあり、授業スキル関係に比べて一階級低かった。

教育の質保証関係のQ6, Q16の結果を図3に示す。この群でも、モードは4.00以上～4.25未満にあり、授業スキル関係に比べて一階級低い側にモードがあった。Q6のモードは、昨期に比べて一階級低い側に移っている。

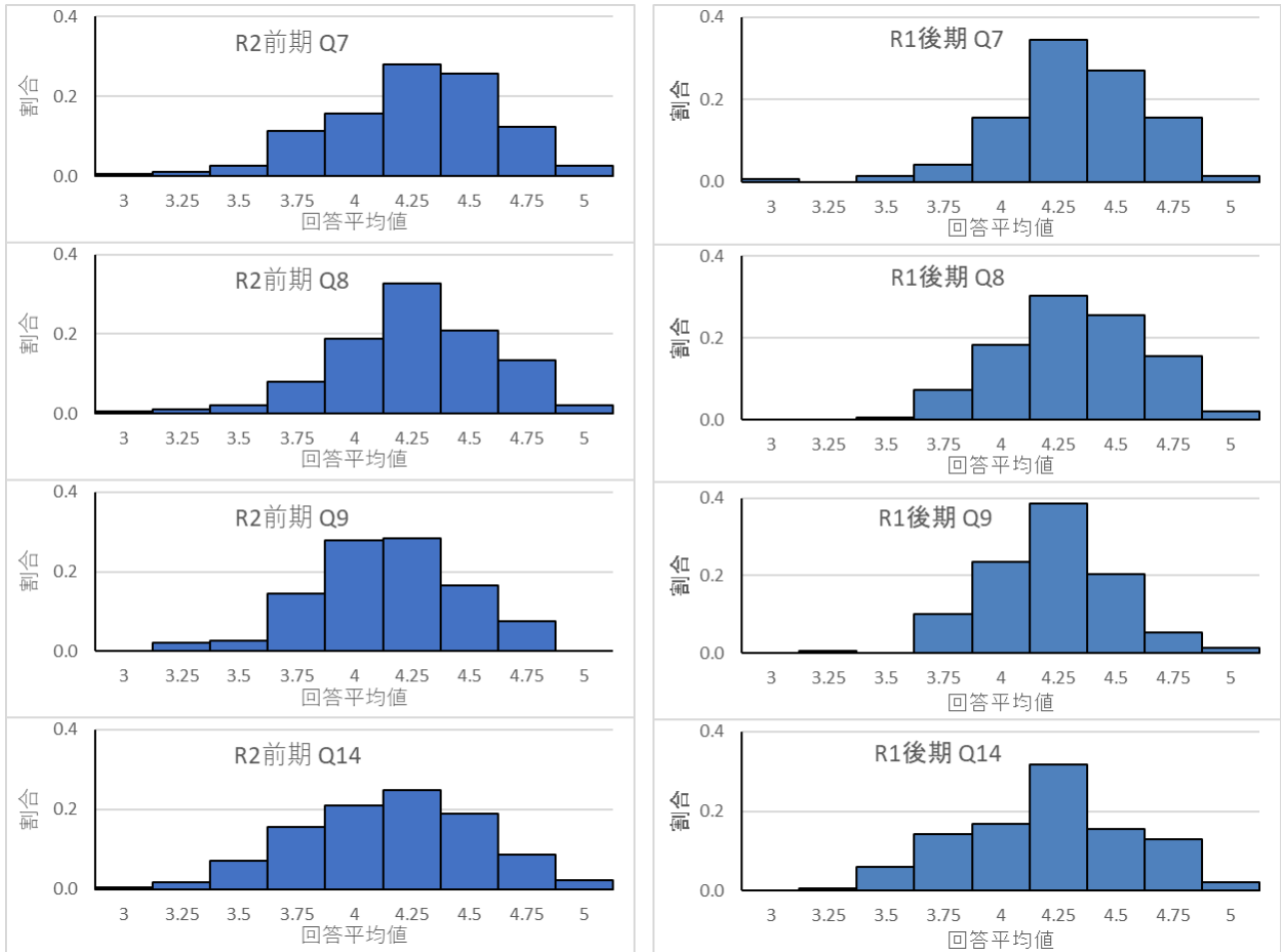


図2 質問項目ごとの回答平均値の分布(Q7～Q9, Q14) : アクティブラーニング関係

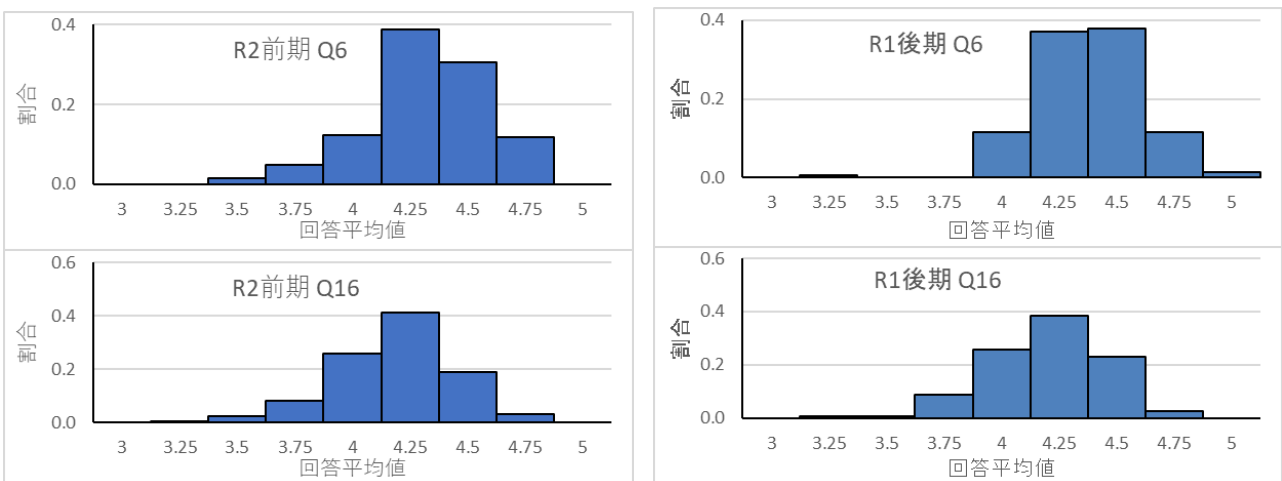


図3 質問項目ごとの回答平均値の分布(Q6, Q16) : 教育の質保証関係

授業ごとのQ1～Q9、Q14及びQ16の質問への回答の評価点の平均値と標準偏差を、質問グループに分けて、表1に示す。すべての質問項目で回答評価点の平均値は4を超え、昨期に比べ、すべての項目で平均値は低く、標準偏差は大きかった。ただし、Q7を除く他のすべて項目で、平均値は昨年度前期と同じか高かった。

個々の授業で、上記の評価からの「外れ」が小さい（平均的である）と判断する目安として、平均値±0.5×標準偏差の値を、表1の下2段（表の上・下限値）に示す。授業科目ごとの平均値がこの範囲に入っていれば「ほぼ平均的レベルにある」と評価できる（統計学的には厳密なものではない）。授業ごとの、教員による自己点検に供されたい。

表1 授業の質問ごとのアンケート結果の平均値と標準偏差等

|      | 授業スキル関係 |      |      |      |      | AL 関係 |      |      |      | 質保証関係 |      |
|------|---------|------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|
|      | Q1      | Q2   | Q3   | Q4   | Q5   | Q7    | Q8   | Q9   | Q14  | Q6    | Q16  |
| 平均値  | 4.23    | 4.19 | 4.15 | 4.28 | 4.23 | 4.13  | 4.13 | 4.01 | 4.02 | 4.18  | 4.04 |
| 標準偏差 | 0.31    | 0.34 | 0.41 | 0.31 | 0.30 | 0.35  | 0.34 | 0.32 | 0.37 | 0.26  | 0.26 |
| 上限値  | 4.38    | 4.36 | 4.35 | 4.44 | 4.38 | 4.31  | 4.30 | 4.17 | 4.21 | 4.31  | 4.17 |
| 下限値  | 4.08    | 4.02 | 3.94 | 4.12 | 4.08 | 3.95  | 3.96 | 3.85 | 3.83 | 4.05  | 3.91 |

### (3) 「優れている」及び「改善を要する」授業数

明らかに優れている又は改善が必要と判断する目安として、平均値±1.96×標準偏差の値を表2示す（表2の上・下限値）。また、この上・下限値の範囲を外れ、「優れている」と「改善が必要である」と評価される授業数を下2段に示す。

今期は、質問項目ごとの「優れている」が授業1～4（0～5, 0～2授業）で、昨期とあまり変わらなかった。「改善を要する」は、授業5～10（1～6, 4～9授業）で、増加した。「改善を要する」授業の増加は、図1及び図2で見られるように、左に強く裾を引く分布を示す項目が多くなり、平均値から下方に大きく離れた値の授業が増えたために生じたものである。

表2 授業の質問ごとのアンケート結果の平均値と標準偏差等 1後期

|         | 授業スキル関係 |      |      |      |      | AL 関係 |      |      |      | 質保証関係 |      |
|---------|---------|------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|
|         | Q1      | Q2   | Q3   | Q4   | Q5   | Q7    | Q8   | Q9   | Q14  | Q6    | Q16  |
| 上限値     | 4.83    | 4.86 | 4.95 | 4.90 | 4.83 | 4.82  | 4.79 | 4.64 | 4.75 | 4.69  | 4.55 |
| 下限値     | 3.63    | 3.52 | 3.35 | 3.66 | 3.64 | 3.44  | 3.46 | 3.38 | 3.29 | 3.67  | 3.54 |
| 優れている数  | 0       | 1    | 0    | 0    | 0    | 2     | 4    | 1    | 4    | 1     | 4    |
| 改善が必要な数 | 8       | 10   | 8    | 7    | 8    | 6     | 7    | 5    | 6    | 10    | 5    |

### (4) 回答平均値の分布の変化に見られる改善と課題

適切に実施されたと受け止められている授業が多く、またその程度が向上していることを示唆している傾向は、平成29年度から継続している。

質問グループごとでみると、授業スキル関係に比べて、アクティブラーニング関係及び教育の質保証関係では、学生の納得度はやや低かったと言える。このことは、学生の能動的な学習を引き出す取り組みや、シラバスに記載された「到達目標」に達することができたかといった点では課題が残っていることを示唆している。この点は、一昨期、昨期の報告書で、Q9、Q14、Q16の一群で回答平均値が最も低いと指摘した課題が続いていると言える。

特に、一昨期に新設した「Q16. 「到達目標」（シラバスに記載）に達することができた」については、モードは他の質問と変わらなかったが、4.0以上の高い評価点側の分布が少なく、このことが平均値の低さに繋がったと考えられる。教員が授業計画・実施上で未だ意識する程度が低いことを反映していると推量され、今後の課題である。

## 2.2 学生の学習行動

学習行動に関する質問 Q10～Q13, Q15 の結果を、図4と表3に示す。予習時間、復習時間は多

くなかった。ヒストグラムからは、予習より復習にやや重みが置かれている傾向が看取できる。予習も復習も全く行っていないとの回答が、引き続き多かったが、少数ながら90分以上の予習、復習を引き出している授業もあった。

授業内外での学習熱心度では、Q13「授業外学習」の自己評価が際立って低かった。自己の学習態度の総合評価の平均値は、5点満点に換算すると、3.9(3.9)程度であった。これらのことは、授業外での学習の不活発さをあまり意識していない本学学生の学習意識を示すものと考えられる。Q15「自身の受講態度の総合評価」では、モードは8.0以上～8.5未満にあり、昨期より大幅に上昇していた。

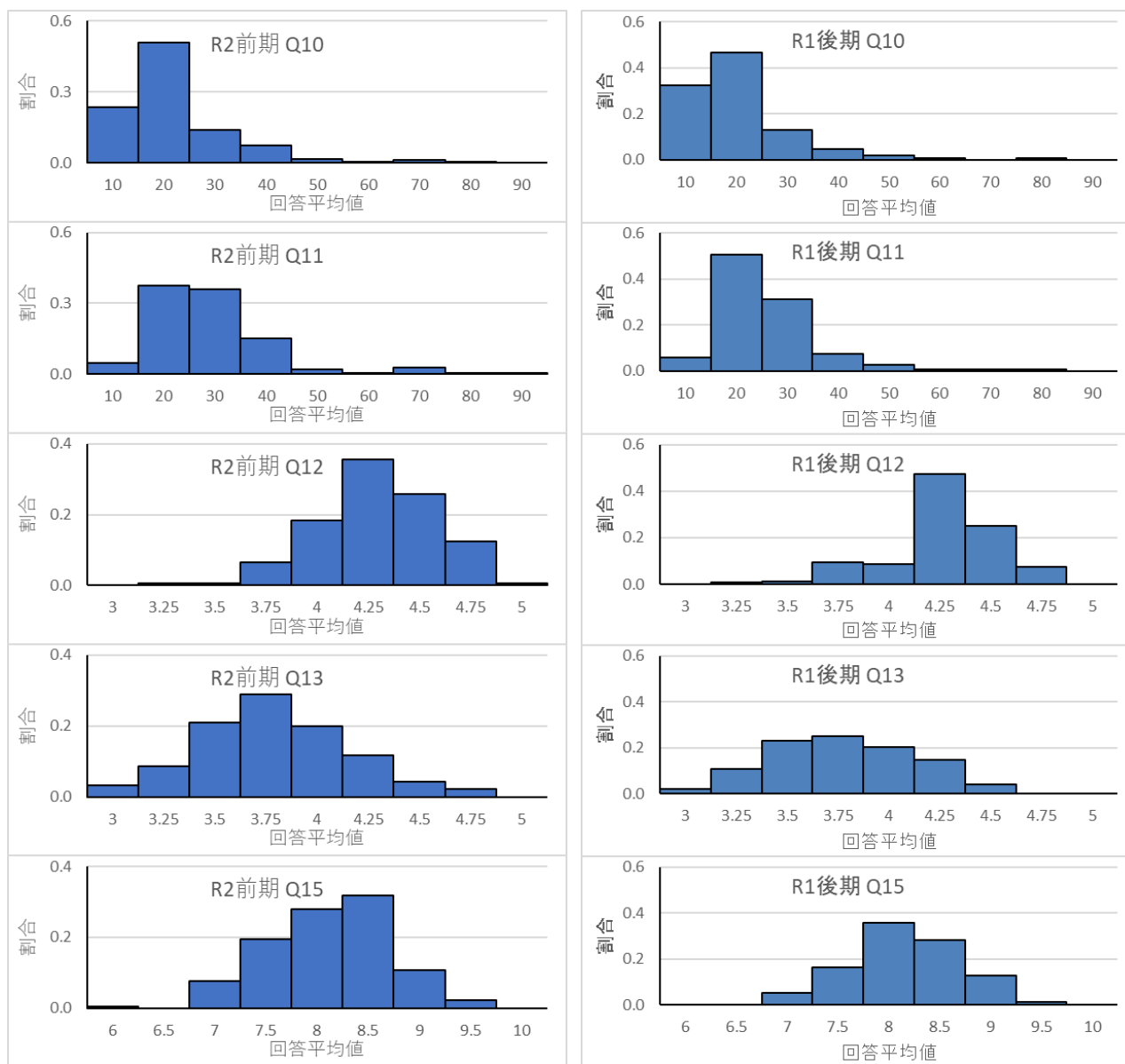


図4 質問項目ごとの回答平均値の分布(Q10～Q13, Q15)：学生の学習行動関係係

表3 授業の学習行動に関する質問ごとの結果の平均値と標準偏差等 1後期

|      | Q10  | Q11  | Q12  | Q13  | Q15  |
|------|------|------|------|------|------|
| 平均値  | 16.6 | 23.4 | 4.16 | 3.65 | 7.87 |
| 標準偏差 | 11.0 | 11.9 | 0.28 | 0.37 | 0.60 |
| 上限値  | 22.1 | 29.4 | 4.30 | 3.84 | 8.17 |
| 下限値  | 11.0 | 17.5 | 4.02 | 3.47 | 7.56 |

### 2.3 自由記述

昨期は、自由記述欄への記載事項を、ポジティブとネガティブな意見に区分して示したが、意見に大きな変化は見られなかったので、今期はこの分析は割愛した。ネガティブな意見としては、引き続き、「早口すぎる」、「声が小さい」、「語尾が不明瞭である」といった基本的な指摘が多かった。

今期の特色として、遠隔授業に関する意見が見られたが、数は多くはなかった。また、「ポジティブ、ネガティブ両方の記載が見られた。

### 3. まとめ

本期の質問項目を、授業のスキル（内容や方法を含む）、アクティブラーニング、教育の質保証関係に分けて分析したのは、昨期から継承したものである。質問項目ごとの評価点の平均値及びその分布から、アクティブラーニングや教育の質保証に関する領域での学生の納得度はやや低いとみられる点は、昨季から変わっていない。

学生の学習態度については、予習・復習に割いている時間や授業外学習への取り組み度からみて、改善はあまり進んでいないと評価できる。もちろんこの改善には、時間を要すると考える。

これらの結果から、本学の授業は、実施手法は確実に改善しているが、学生の自主的な学習行動を引き出したり、学習の達成感を感じさせるところまでは至っていないと考えられる。今後の改善に向けた課題としたい。

平成29年度の本分析開始以来、質問事項や選択肢に改善を加えてきた。現在の質問は、学生の能動的な学習行動や学修の達成感を問う質問も含まれており、今後暫くは継続したモニタリングに利用できるものと考えられる。ただし、「Q8. 質問や意見に適切に対応してもらえた」は、アクティブラーニングの視点を明確にするために「質問や意見を述べる時間が設定されていた」と変えた方がよい。また、「Q15. あなた自身の受講態度の総合評価」も、授業内のみでの学習と誤解されるのを避けるため、「あなた自身のこの科目に関する学習態度の総合評価」と変えた方がよい。

